

譬喩歌の類の表現形式

Expression Types of Hiyuka-style

上森 鉄也*

Tetsuya Kamimori

万葉集の譬喩歌は寓喩の歌であるとされているが、寓喩ではないと考えられる歌も存在しており、その範囲は曖昧である。しかし、編者は寓喩の歌である譬喩歌とそれに準ずる譬喩歌の類という二つの基準を持っていたと考えられる。そして、譬喩歌と譬喩歌の類の歌の表現形式は、二つのものを類比させた表現ではなく、二つのことを類比させた表現であるという点で共通していると考えられる。

キーワード：万葉集、譬喩歌、比喩、序詞

1. 序

万葉集の譬喩歌は寓喩の歌であるとされているが、寓喩ではないと考えられる歌も存在しており、その範囲は曖昧である。しかし、巻7「譬喩歌」の1374～1375には次のような左注がある。

闇の夜は苦しきものをいつしかと我が待つ月もはやも照らぬか (⑦・1374)

朝霜の消易き命誰がために千歳もがもと我が思はなくに (⑦・1375)

右の一首は、譬喩歌の類にあらず。ただし、闇の夜の歌人の所心の故に、並にこの歌を作る。因りてこの歌を以て、この次に載せたり。

編者は、歌の一部が比喩表現である歌は譬喩歌と認めなかったものであり、譬喩歌の範囲について一定の基準をもっていたと考えられる。そして、「譬喩歌の類」というのは、巻2「挽歌」の141～145の歌の左注に「柩を挽く時に作る所にあらずといへども、歌の意を准擬す。故以に挽歌の類に載せたり」とあることなどから、「譬喩歌」という部立に収める歌の基準には合致しないものの類似の歌であるという意味の表記であると考えられる。そのため、編者は「譬喩歌にあらず」と記述せずに「譬喩歌の類にあらず」としたのであり、1375は類似の歌でもないことを注したのである。

つまり、「譬喩歌」に収められている歌には、譬喩歌と譬喩歌の類という二つの表現形式があったのであり、譬喩歌が寓喩の歌、そして譬喩歌の類が寓喩ではないものの類似の歌であったのではないかと考える。そして、上森鉄也(2013)は、譬喩歌の表現形式が一定でないのは、寓喩の歌である譬喩歌と寓喩の歌ではない譬喩歌の類という二つの基準によって選ばれた歌が「譬喩歌」

に収められたためであるとした。

それでは譬喩歌の類とは、どのような性格のものであったのであろうか。本稿では、譬喩歌の類の表現形式を分類するとともに、編者が譬喩歌の類を「譬喩歌」に収めることになった事情について検討する。なお、便宜上「譬喩歌」に収められている歌を譬喩歌、部立名を「譬喩歌」と表記する。

2. 寓喩ではない譬喩歌

万葉集に「譬喩歌」として収められている歌は164首あるが、寓喩と考えられる歌が118首であり7割を占めている。この寓喩の歌とは次のような歌である。

ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり思ひしものを (③・392)

これは、女性を梅になぞらえて詠んだ歌であるが、本来の譬喩歌は、このように相手などをある事物として詠む寓喩の歌であったと考える。

そして、「譬喩歌の類にあらず」と注された歌が1首、寓喩ではないと考えられる歌が45首であるが、寓喩ではないとされる歌は、たとえば次のような歌である。

軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに (③・390)

三国山木末に住まふむささびの鳥待つごとく我待ち瘦せむ (⑦・1367)

天雲に近く走りて鳴る神の見れば恐し見ねば悲しも (⑦・1369)

390は巻3「譬喩歌」の冒頭歌であるが、『新編古典全集』巻第3解説では「この歌は表現法からいって正しい意味での譬喩歌でない」とし、『和歌文学大系』では「この歌ではスラニがあり、人間の場合はなおさらという余意が強いので逆説として寝ないものをと解される。譬喩歌に収められているが、厳密に言うと、これは寓喩の歌とは言えない。スラニを用いたためにむしろ直喩的な性格が強くなり、後続の歌とは異なった印象を与える」としている。また1367は『全注』が「第四句までが第五句の直喩である」とし、1369については『新編古典全集』が「鳴る神の一以上三句、見レバ恐シを起こす序」としている。

このような寓喩ではないと考えられる歌については、『古典集成』のように「譬喩歌」に収められていることから寓喩の歌として解釈しようとする注釈書もあるが、「譬喩歌」に収められている歌をすべて寓喩の歌と解釈することには無理があろう。それに対して、寓喩の歌である譬喩歌と寓喩ではない譬喩歌の類という二つの基準が編者にあったと考えれば、寓喩の歌が多く収められていながら寓喩でない歌も収められているという現状を説明することができる。そして、そのように考えた場合、井手至(1993)の次のような指摘が重要となる。

家持が、巻三の部立名としてはじめて採用した「譬喩」という用語は、『毛詩』大序の中の六義説の「風」に関する「鄭箋」に「風化風刺、皆謂譬喩不斥言也」とあるのによると説かれているが、この引き当てが正当なものであることは、後にも述べるように、巻三「譬喩歌」

の部立の中に、暗示的な喩の歌が集められていることによって証せられるところである。

井手(1993)は、このことから直喩である1367と譬喩歌の類でない1375を除く「譬喩歌」の歌をすべて喩の歌としているが、既に述べたように一律に喩と解釈することには無理がある。しかし、編者が何らかの事情から喩ではない歌も譬喩歌の類として「譬喩歌」に収めたが、本来は喩の歌を「譬喩歌」に収めるべき歌であると考えていたとすれば、「譬喩歌」という部立名の由来が「風化風刺、皆謂譬喩不斥言也」とあるのによるとすることは、やはり妥当であろう。

3. 譬喩歌の類の分類

では、譬喩歌の類である喩ではないと考えられる歌の表現形式について検討したい。ここでは便宜上、対比される事物をA、対比する事物をBとするが、分類としては四つのグループに分けられると考える。第1グループが喩の歌と発想が同じ歌、第2グループが自分や相手などがある事物と比較している歌、第3グループが序詞的な歌、そして第4グループがそれ以外の歌である。

まず、第1グループの喩の歌と発想が同じ歌について述べる。

ア、AをBとみる

a なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ(③・408)

b 君に似る草と見しより我が標めし野山の浅茅人な刈りそね(⑦・1347)

c 我が心ゆたにたゆたに浮き蓐辺にも沖にも寄りかつましじ(⑦・1352)

d 息の緒に思へる我を山ぢさの花にか君がうつろひぬらむ(⑦・1360)

e 岩倉の小野ゆ秋津に立ち渡る雲にしもあれや時をし待たむ(⑦・1368)

f 広瀬川袖漬るばかり浅きをや心深めて我が思へるらむ(⑦・1381)

g 潮満てば入りぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き(⑦・1394)

h 衣しも多くあらなむ取り替へて着ればや君が面忘れたる(⑩・2829)

i 川上に洗ふ若菜の流れ来て妹があたりの瀬にこそ寄らめ(⑩・2838)

j いくばくも降らぬ雨故我が背子がみ名のここたく滝もとどろに(⑩・2840)

aは、相手がなでしこの花であってほしいと詠んだ歌であるが、「にもが」は希求を意味する語であり、喩の歌ではない。しかし、喩の歌としてあげた392の相手を梅として詠んだ歌と比べると、相手がなでしこの花であったらという発想は同じであり、対比される相手も表記していない。bも相手を草とみた上で詠んだものであり、同様の歌と考えられるものの対比される「君」を表記している点が異なっている。cとdも対比される「我が心」「君」を表記しているが、e～jは対比される事物を表記しておらず、aと同じ表現形式の歌であると考えられる。なお、jはろくに逢ってもいないことを「いくばくも降らぬ雨」とした上で詠んだ歌であり、対比される事物が

相手や自分ではない点で他の歌と異なっているが、対比される「ろくに逢ってもいないこと」を対比する「いくばくも降らぬ雨」とみて詠んだ歌と考え同じグループとした。

アの歌は、対比される相手や自分などを表記していないものと表記しているものがあるが、いずれも対比される事物Aを対比する事物Bとみた上で詠んでいる点で同様の表現形式であると考ええる。

次に、第2グループである自分や相手などのある事物と比較している歌である。

イ、BはCであるのにAはCでない

a 軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに (③・390)

b 陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを (③・396)

c たらちねの母がその業る桑すらに願へば衣に着るといふものを (⑦・1357)

d 祝らが斎ふ社のもみち葉も標繩越えて散るといふものを (⑩・2309)

aは、鴨でさえひとり寝をしないのにと詠む歌で、軽いものをあげて重いものを類推させる語である「すらに」が表記されているため寓喩ではないが、自分と鴨を比較していると考えられる。そして、自分自身のことは表記していない。bは、陸奥の真野の草原は遠くても面影として見えるというのにと詠んだ歌で、近くにいながらどうしてあなたは見えないのかという余意を含んでおり、相手と草原を比較していると考えられ、やはり相手のことは表記していない。c・dも同様で、相手と桑、相手ともみち葉を比較している歌と考えられ、いずれも相手のことを表記していない。

ウ、BがCであるのでAはCである

a 明日香川七瀬の淀に住む鳥も心あれこそ波立てざらめ (⑦・1366)

エ、BがCであるよりAはCである

a みさご居る渚に居る舟の夕潮を待つらむよりは我こそまされ (⑩・2831)

オ、BがCであってもAはCではない

a 葦鴨のすだく池水溢るともまけ溝の方に我越えめやも (⑩・2833)

カ、AはBではないのにCである

a かくしてやなほや老いなむみ雪降る大荒木野の篠にあらなくに (⑦・1349)

b かくしてやなほやなりなむ大荒木の浮田の社の標にあらなくに (⑩・2839)

ウ～カの歌も、自分と鳥、舟、池水、篠、標とを比較している歌であると考えられるが、エ・オの歌は自分を「我」と表記している。したがって、自分自身を表記していないものと表記しているものがあるが、イ～カの歌は相手や自分などのある事物と比較しているという点で、同じ表現形式の歌であると考えられるのである。

そして、第3グループである序詞的な歌が次のような歌である。

キ、序詞的

- a 奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも (③・397)
- b 楽浪の志賀津の浦の船乗りに乗りにし心常忘れえず (⑦・1398)
- c 百伝ふ八十の島廻を漕ぐ船に乗りにし心忘れかねつも (⑦・1399)
- d 天雲のたなびく山の隠りたる我が下心木の葉知るらむ (⑦・1304)
- e 天雲に近く走りて鳴る神の見れば恐し見ねば悲しも (⑦・1369)
- f 木綿掛けて祭る三諸の神さびて斎ふにはあらず人目多みこそ (⑦・1377)
- g 木綿掛けて斎ふこの社越えぬべく思ほゆるかも恋の繁きに (⑦・1378)
- h ま鉋持ち弓削の河原の埋もれ木の頭はるましじことにあらなくに (⑦・1385)
- i 大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ (⑩・2834)
- j 遠江引佐細江の水脈つくし我を頼めてあさましものを (⑭・3429)
- k 足柄の安伎奈の山に引こ舟の後引かしもよこば児がたに (⑭・3431)
- l 伊香保ろの沿ひの榛原我が衣に着き宜しもよひたへと思へば (⑭・3435)
- m しらとほふ小新田山の守る山のうらがれせなな常葉にもがも (⑭・3436)
- n 膝に伏す玉の小琴の事なくはいたくここたく我恋ひめやも (⑦・1328)
- o 豊国の企救の浜辺の砂地真直にしあらば何か嘆かむ (⑦・1393)
- p 沖つ波寄する荒磯のなのりそは心の中に疾となれり (⑦・1395)
- q 足柄の和乎可鶏山のかづの木を我をかづさねもかづさかずとも (⑭・3432)
- r 薪伐る鎌倉山の木垂る木をまつと汝が言はば恋ひつつやあらむ (⑭・3433)

a は菅の根が深いことと深く結んだ心に関係づけて忘れないと詠んだ歌である。この歌は、初二句あるいは三句を序詞とすることが多かったのであるが、『注釋』が序詞ではなく比喩であるとしてからは「譬喩歌」に収められていることが考慮され、序詞とはされなくなった。ただし、『全歌講義』は「上二句を序詞とすることができよう」としている。bとcは、ともに船に乗ることと信頼しきって任せて乗った心に関係づけて忘れられないと詠んだ歌であり、aと似た表現となっている。しかし、この2首は上三句を序詞とする注釈書が多く、aを比喩とした『注釋』や近年の注釈書である『新古典大系』も上三句は「乗り」の序詞としている。そして、dは『新編古典全集』『和歌文学大系』『全歌講義』が上二句を序詞としているように典型的な序詞の歌といつてよいであろう。以下e～rも同様で、「譬喩歌」に収められていなければ序詞の歌と考えてよいものと思われる。

また、序詞の形式としてみるとmまでは比喩的序詞と考えることができるが、『新編古典全集』がnを「同音によって『事』を起す序」、oを「類音によってマナホを起す序」、pを「第一・第二句を序として、親や他人に対しては『な告りそ』と相手が口止めした言葉とみるほうが分かり易い」、qを「同音によってカツサネモのカツを起す序」とし、rは『新古典大系』が「上三句は、『松』の序詞。『松』には「待つ」の意が掛かる」としているように、比喩的ではない形式のもの

と考えられる。

最後に、第4グループのそれ以外の歌である。

ク、枕詞的

a 嘆きせば人知りぬべみ山川の激つ心を塞かへてあるかも (⑦・1383)

ケ、直喩

a 三国山木末に住まふむささびの鳥待つごとく我待ち瘦せむ (⑦・1367)

コ、暗示

a ひさかたの雨には着ぬを怪しくも我が衣手は干る時なきか (⑦・1371)

サ、その他

a 絶えず行く明日香の川の淀めらば故しもあるごとく人の見まくに (⑦・1379)

b 泊瀬川流る水沫の絶えばこそ我が思ふ心遂げじと思はめ (⑦・1382)

c 水隠りに息づき余り速川の瀬には立つとも人には言はめやも (⑦・1384)

d 冬ごもり春の大野を焼く人は焼き足らねかも我が心焼く (⑦・1336)

e 真鳥住む雲梯の社の菅の根を衣にかき付け着せむ児もがも (⑦・1344)

クは比喩的枕詞の歌であり、ケは「ごとく」が用いられている直喩の歌である。そして、コは譬喩歌の類としても異例で、比喩的表現ではなく涙で袖が濡れていることを暗示する歌である。最後のサは、a・bが起り得ないような自然現象の変位を条件とする歌であり、cが危険な局面を速川の崖つぶちに立つと詠んだ歌、また、dが「自分の熱く焦れる思いを、焼畑作業の火力超過のせいかとする、戯笑歌的な表現」(『新編古典全集』)の歌で、eが雲梯の社の菅の根を衣にかき付ける行為の意味は明らかではないが、何らかの比喩と思われる歌であって、これまでの歌とは形式が異なっているものの比喩的要素もっている歌をまとめた。

以上、譬喩歌の類をア～サに分けたが、表現形式としては、アの寓喩の歌と発想が同じ歌、イ～カの自分や相手などがある事物と比較している歌、キの序詞的な歌、そしてク～サのそれ以外の歌という四つのグループに分けられると考えられるのである。

4. 譬喩歌の類が「譬喩歌」に収められた理由

譬喩歌の類は、譬喩歌の類にあらずと注された1375を除く譬喩歌163首中45首で27パーセントを占めているが、各巻の「譬喩歌」「譬喩」における譬喩歌の類の歌数は次の通りである。

巻3…25首中4首 巻7…107首中27首 巻10…3首中1首 巻11…13首中7首

巻13…1首中0首 巻14…14首中6首

「挽歌の類」のように、部立に収める歌の基準には合致しないものの類似の歌として収められている歌は存在しているが、ごく少数であり、例外的存在である。それに比べると譬喩歌の類は歌数が多く、また、譬喩歌が1首のみである巻13以外の各巻に存在している。したがって、編者

がこれら譬喩歌の類を例外的に「譬喩歌」へ収めたとは考えにくい。当初から寓喩の歌と寓喩ではない譬喩歌の類という二つの表現形式を認識しており、「譬喩歌」に収めたと考えるのが妥当であろう。そして、譬喩歌の7割以上を占める寓喩の歌こそ、本来の譬喩歌という認識をもっていたのではないかと考えるのである。それでは、どのような理由から寓喩以外の表現形式の歌を譬喩歌の類として「譬喩歌」に収めたのであろうか。

ここで注目したいのは巻3の譬喩歌の類である。譬喩歌の類は四つのグループに分けられると述べたが、アの寓喩の歌と発想が同じ歌が10首、イ～カの比較の歌が9首、キの序詞的な歌が18首であり、45首中37首という82パーセントの歌が、この三つのグループの歌ということになる。そして、それぞれのグループは巻3の歌で始まっている。巻3の譬喩歌の類はわずか4首であるが、この三つのグループのいずれにも巻3の譬喩歌の類が存在しているのである。編者が寓喩以外の表現形式の歌を「譬喩歌」に収めることになったのは、この巻3の譬喩歌の類が理由ではないかと考える。

なお、巻3「譬喩歌」の歌の表現形式と寓喩以外の歌が収められている理由については、上森鉄也（1987）が巻4に存在する寓喩の歌と比較することにより論じたことがあるが、そのときには譬喩歌の類の概念を認識しておらず、序詞的な歌である397を「譬喩歌」に収めてもよい歌とは認めなかった。また見落としていた歌もあるため、重複する部分があるが、その後の研究も踏まえて述べてみたい。

さて、巻3の譬喩歌の類の1首目は紀皇女の作で、比較の歌であるイのaである。

紀皇女の御歌一首

軽の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻の上にひとり寝なくに（③・390）

そして、2種目と3首目は、笠女郎の3首歌の中にある。

笠女郎が大伴宿禰家持に贈る歌三首

託馬野に生ふる紫草衣に染めいまだ着ずして色に出でにけり（③・395）

陸奥の真野の草原遠けども面影にして見ゆといふものを（③・396）

奥山の岩本菅を根深めて結びし心忘れかねつも（③・397）

第1首の395は、相手の家持を高貴な色である紫色の染料を採る紫草になぞらえて詠んだ寓喩の歌、つまり譬喩歌であるが、第2首の396は390と同じく比較の歌としてイのbにあげた歌であり、第3首の397は序詞的な歌としてキのaにあげた歌である。

また、4首目は家持の作で、寓喩の歌と同じ発想の歌としてアのaにあげた歌である。

大伴宿禰家持が同じ坂上家の大嬢に贈る歌一首

なでしこがその花にもが朝な朝な手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ（③・408）

巻3の譬喩歌の類の歌は、このように記載されているのであるが、これら4首が「譬喩歌」に収められることになったのは、笠女郎の3首を「譬喩歌」に収めるためではなかったかと考える

のである。

笠女郎の3首は、1首目の395が寓喩の歌であり、「譬喩歌」に収められるべき歌であると考えられる。しかし、395だけを単独で「譬喩歌」に収めると3首の構成を壊してしまうことになる。この3首については、平舘英子（1984）が、地名のさす自然が「野」「草原」「山」と家の近辺から遠くへと及んでいると説いており、青木生子（1998）は、ある地域の植物である紫草、草原、菅を共通の素材にして、見事なまとまりをもって作られたものとしている。また、『釋注』は「第一首は契りを結ぶ前の恋、第二首は近くて遠い恋、第三首は契りを結んでのちの恋をうたったもので、恋を三種の状態に分けて譬喩に託したところに手腕も眼目もある」としている。

構成の内容についての見方は様々であるが、395～397が意図的に並べられており、構成をもっていると考えるのが妥当であろう。そして、編者はそのことを理解しており、395だけを「譬喩歌」に収めるわけにはいかなかったのである。ただし、396と397に全く比喩的要素がなければ「譬喩歌」に収められることはなかったと思われる。なぜなら巻3「譬喩歌」の歌は巻4「相聞」にあった歌を抜き出したものであるとされているが、巻4「相聞」には明らかに寓喩と考えられる歌が存在しているのである。

娘子が報へ贈る歌二首

いかばかり思ひけめかもしきたへの枕片去る夢に見えける（④・633）

家にして見れども飽かぬを草枕旅にも妻とあるがともしさ（④・634）

湯原王のまた贈る歌二首

草枕旅には妻は率たれども櫛笥の内の玉こそ思ほゆれ（④・635）

我が衣形見に奉るしきたへの枕を放けずまきてさ寝ませ（④・636）

大伴坂上郎女の歌二首

ひさかたの天の露霜置きにけり家なる人も待ち恋ひぬらむ（④・651）

玉守に玉は授けてかつがつも枕と我はいざ二人寝む（④・652）

635は、女性を玉になぞらえて詠んだ寓喩の歌と考えられるが、女性を玉として詠む寓喩の歌は、巻3「譬喩歌」にも次のような例があり、譬喩歌に多く見られる。

朝に日に見まく欲りするその玉をいかにせばかも手ゆ離れずあらむ（③・403）

いなだきにきすめる玉は二つなしかにもかくにも君がまにまに（③・412）

しかし、635は、旅にも妻と一緒にとはうらやましいと詠んだ娘子の634に対して、娘子を櫛笥の内の玉とし、旅には妻を連れているが櫛笥の内の玉だけを思っていると応じた湯原王の歌である。さらに、636は633に対応している歌であり、この4首から635だけを抜き出すと、娘子と湯原王の贈答歌の構成を壊してしまうことになるのである。そして、635以外の3首には笠女郎の396・397のような比喩的要素はなく、「譬喩歌」に収めることはできない。そのため、編者は贈答歌の構成を壊さないことを優先し、635を巻3「譬喩歌」に抜き出すことはせずに巻4「相聞」

に残したのであると考える。

また、坂上郎女の 652 も玉になぞらえているが、この歌は 412 と同じく自分の娘を玉として詠んだと思われる寓喩の歌であり、巻 3「譬喩歌」に抜き出されてもよい歌であると考え。しかし、同時に詠んだ歌と思われる 651 は、比喩的要素がなく「譬喩歌」には収めることができない歌である。この 2 首も同じ作者が同時に詠んだ歌であることを重視して、編者は 652 だけを巻 3「譬喩歌」に抜き出すことはせずに巻 4「相聞」に残したのであると考える。

そして、次の 4 首のうち最後の 630 も『新古典大系』が「初・二句は、うら若い少女が人に手折られてしまうことの寓意」としているが、橋本四郎（1978）は、630 は 627 からの一連の作と説いている。

娘子、佐伯宿禰赤麻呂に報へ贈る歌一首

我が手本まかむと思はむすらをはをち水求め白髪生ひにたり（④・627）

佐伯宿禰赤麻呂が和ふる歌一首

白髪生ふことは思はずをち水はかにもかくにも求めて行かむ（④・628）

大伴四綱が宴席の歌一首

なにすとか使ひの来つる君をこそかにもかくにも待ちかてにすれ（④・629）

佐伯宿禰赤麻呂が歌一首

初花の散るべきものを人言の繁きによりてよどむころかも（④・630）

橋本（1978）は、この 4 首は同じ宴席の歌で、娘子は佐伯赤麻呂の創作にかかる架空の存在であり、629 は大伴四綱が娘子役を演じて 628 に答えたものであって、それに応じたのが赤麻呂の 630 なのであるとした。そして、『釋注』がそれを支持しているが、『全歌講義』は、四綱の歌を別時の歌ととれば、630 は娘子とは切り離してみることができるとする。

630 は、女性を花になぞらえて詠んだと思われる寓喩の歌で、巻 3「譬喩歌」に抜き出されてもよい歌であると考え。しかし、それが巻 4「相聞」に残されているということは、寓喩の歌である 635 や 652 が残されていることと同様で、編者が 4 首を一連の贈答歌と認識していたためであると考えるのが妥当であろう。

また、巻 4「相聞」末の大伴家持と藤原久須麻呂の贈答歌にも寓喩ではないかと思われる歌が含まれている。

大伴宿禰家持が藤原朝臣久須麻呂に報へ贈る歌三首

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも（④・786）

夢のごと思ほゆるかもはしきやし君が使ひのまねく通へば（④・787）

うら若み花咲き難き梅を植ゑて人の言しみ思ひそ我がする（④・788）

786・788 は、家持が自分の娘を梅になぞらえて詠んだ寓喩の歌であると思われるが、背後事情が不明であることから定かではない。しかし、贈答歌であることを重視すれば、やはり 786・788

だけを抜き出すことはできなかつたであろう。

以上、巻4「相聞」の寓喩と思われる歌をみてきたが、いずれも比喩的要素をもたない歌とともに詠まれた贈答歌や連作の歌であった。そのため編者は巻3「譬喩歌」に抜き出すことはせずに巻4「相聞」に残したのであると考える。

これに対して笠女郎の396・397は、寓喩の歌ではないものの比喩的要素をもっており、編者は「譬喩歌」に収めてもよい歌、すなわち譬喩歌の類と認識し、寓喩の歌である395とともに3首を抜き出したのであると考える。そして、390は396と同じ比較の歌であり、また鴨と対比される人物を表記していない点において、草原と対比されている人物を表記していない396と同じ暗示的な歌である。また、408もなでしこの花であってほしい人物のことは表記しておらず、396と同じ暗示的な歌であるといえる。そのため編者は390・408の2首も譬喩歌の類として巻3「譬喩歌」に収めたのであると考える。

ただし、編者は譬喩歌の類を「譬喩歌」に収めず、寓喩の歌のみを譬喩歌の範囲とすることもできたのではないかと思われる。巻3「譬喩歌」の場合、笠女郎の3首と他の譬喩歌の類2首を収めなくとも20首存在することになり、支障があるほど少ないとは考えにくい。ところが、編者は譬喩歌の類も巻3「譬喩歌」に収めることを選んだ。390の紀皇女の歌は「譬喩歌」の冒頭歌にふさわしい人物の歌としておかれたとされており、そのことも譬喩歌の類を収めることにした理由の一つと考えられる。

しかし、「鄭箋」の「風化風刺、皆謂譬喩不斥言也」に従ったためでもあったのではなかろうか。巻3「譬喩歌」の譬喩歌の類4首の中で390・396・408の3首が対比される自分や相手を表記していない暗示的な歌、すなわち「斥言」しない歌なのである。この推測が正しければ、「風化風刺、皆謂譬喩不斥言也」は「譬喩歌」の部立名の由来というだけでなく、編者の考える譬喩歌の範囲にまで影響を与えたことになろう。

そして、編者が譬喩歌の類をすべて巻4から抜き出しているかということ、譬喩歌の類と考えられる歌もまた巻4「相聞」に存在している。

大伴坂上大嬢が大伴宿禰家持に贈る歌三首

玉ならば手にも巻かむをうつせみの世の人なれば手に巻き難し (④・729)

逢はむ夜はいつもあらむをなにとかその夕逢ひて言の繁きも (④・730)

我が名はも千名の五百名に立ちぬとも君が名立たば惜しみこそ泣け (④・731)

また大伴宿禰家持が和ふる歌三首

今しはし名の惜しけくも我はなし妹によりては千度立つとも (④・732)

うつせみの世やも二行くなにとか妹に逢はずて我がひとり寝む (④・733)

我が思ひかくしてあらずは玉にもがまことも妹が手に巻かれむを (④・734)

坂上大嬢の729は、相手が玉であったならと詠む歌であるが相手を表記しておらず、408と同

様の歌であるといえる。しかし、730・731は比喩的要素のない歌であり、また734は大伴家持が729に応じた歌である。したがって、729だけを抜き出すことは贈答歌の構成を壊すことになり、また比喩的要素のない歌があるので他の歌とともに巻3「譬喩歌」に収めることはできない。そのため巻4「相聞」に残されたのであり、寓喩の歌と同様であったと考える。

そして、390・396のような比較の歌であり、相手などを表記していない暗示的な歌は巻4「相聞」にはみられない。したがって、寓喩の歌と同じ発想の歌や比較の歌であり、相手などを表記しない暗示的な歌を譬喩歌の類とするということについては、編者の認識はかなり明確なものであったのではないかと考えられる。

しかし、序詞的な歌は、397と同じく忘れられないと結ぶキのb・cのような歌こそ存在しないが、比喩的序詞を用いた単独歌は次のような歌など3首みられる。

安都宿禰年足が歌一首

佐保渡り我家の上に鳴く鳥の声なつかしき愛しき妻の児(④・663)

比喩としてみた場合、397は喩義である「岩本菅」と本義である「心」が表記されており暗示的な歌とはいえない。序詞的な歌は、編者にとって「譬喩歌」に収めてもよいが収めなくてもよいという譬喩歌の類の範囲の境界線上にある歌であったのではなかろうか。そして、397は連作の中の1首であったために巻3「譬喩歌」に収められたのではないと思われる。

5. 巻3以外の譬喩歌の類

では、巻7以降の譬喩歌の類はどうであろうか。巻7「譬喩歌」の譬喩歌の類は、巻3「譬喩歌」の譬喩歌の類にしたがって収められたと思われるが、比較の歌3首が対比される自分を表記していないものの、アの寓喩と同じ発想の歌6首中b・c・dの3首は対比される相手などを表記しており、序詞的な歌10首やク～サの様々な表現形式の歌が収められている。ケの直喩の歌については、上森鉄也(2010)が1366との贈答歌であったため「譬喩歌」に収められたとしたが、他の歌すべてを贈答などの関係により「譬喩歌」に収めたと考えるのは無理があり、譬喩歌の類の範囲が曖昧になっているといえよう。

また、巻10の譬喩歌の類は、対比される相手を表記していない比較の歌であるイのdの1首であるが、巻10「春相聞」には次のような寓喩と考えられる歌が存在しており、寓喩の歌を「譬喩歌」に収めるという方針自体が杜撰になっている。

出でて見る向かひの岡に本繁く咲きたる花の成らずは止まじ(⑩・1893)

狭野方は実に成らずとも花のみに咲きて見えこそ恋のなぐさに(⑩・1928)

狭野方は実になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも(⑩・1929)

そして、巻11の譬喩歌の類は、アの寓喩と発想が同じ歌が3首あり、対比されるものを表記していないが、比較の歌3首中エ・オの2首が対比される「我」を表記しており、序詞的な歌も1

首存在している。しかし、巻 11 で問題となるのは「寄物陳思」の歌との関係であろう。アの寓喩と発想が同じ歌である h のように女性を衣になぞらえた歌や比較の歌エと同様の歌が「寄物陳思」にみられる。

古衣打棄つる人は秋風の立ち来る時に物思ふものそ (㊦・2626)

人言はしましそ我妹綱手引く海ゆまさりて深くしそ思ふ (㊦・2438)

ただし、巻 11 の「寄物陳思」には次のような寓喩の歌も収められているなど厳密に分類されていないことが既に指摘されている。

白玉を巻て持ちたる今よりは我が玉にせむ知れる時だに (㊦・2446)

また、次のような譬喩歌の類としたキの i の 2834 とアの i の 2838 の歌、

大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものを成らずは止まじ (㊦・2834)

川上に洗ふ若菜の流れ来て妹があたりの瀬にこそ寄らめ (㊦・2838)

については『新編古典全集』が、2834 を「正確には『寄物陳思』の中に収めるべき表現形式の歌」とし、2838 を「これも『寄物陳思』というほうが近い」としている。しかし、これは寓喩の歌を正しい意味の譬喩歌と考えているため、寓喩ではない譬喩歌の類も巻 11 「譬喩」に収める歌の範囲であると考えれば問題ではなくなる。

そして、序詞的な歌である 2834 については、『新編古典全集』が「成ルは恋の成就を意味するが、毛桃と縁語をなす」と述べている。上森鉄也 (2013) は、譬喩歌の類ではないとされた 1375 と譬喩歌の類であるクの枕詞的な歌との違いは、クの歌が縁語的表現を用いている点であるとしたが、巻 11・12 の「寄物陳思」には、クの歌と同じく枕詞と縁語を用いた次のような歌、

言に出でて言はばゆゆしみ山川の激つ心を塞かへたりけり (㊦・2432)

があるものの「寄物陳思」の大半を占める序詞の歌の中には縁語を用いている歌はみられない。2834 に関しては、縁語を用いている序詞の歌であったため「譬喩」に収められたのではなかろうか。

そして、最後に巻 14 の譬喩歌の類であるが、6 首すべてをキの序詞的な歌であるとした。ただし『和歌文学大系』は j を寓喩の歌と解し、『全歌講義』は l・m を「完全な譬喩歌」すなわち寓喩の歌としている。したがって、k・q・r の「右の三首、相模国の歌」とされる 3 首が、確実な譬喩歌の類といえるのであるが、巻 14 「相聞」の序詞の歌とどのように区別したのかは不明である。

以上、巻 7 以降の譬喩歌の類をみてきたが、巻 3 に比べるとその範囲は曖昧になっており、範囲の程度も巻によって異なっている。そして、その表現形式をみた場合、巻 7 は多様であるが、その他の巻は巻 3 の譬喩歌の類と同じグループの歌が収められているといえよう。

6. 比喩の要素と譬喩歌

譬喩歌の類が「譬喩歌」に収められることになったのは、巻4「相聞」から巻3「譬喩歌」に本来の譬喩歌である寓喩の歌を抜き出す際に、寓喩ではないが比喩的要素をもつ歌を含む笠女郎の三首歌を抜き出すためであったと考える。つまり、譬喩歌の類は、寓喩の歌を「譬喩歌」に収めるということと、連作などの歌の場合は構成を重視して比喩的要素をもつ歌であればそのまま収めるという二つの方針により生じたのである。しかし、この二つの方針が立てられたのは、編者の譬喩歌すなわち寓喩の歌に対する認識が根本にあったのではなかろうか。

比喩の要素としては、一般的に本義・喩義・比喩の説明語句の3つとされているが、近年では類似性の根拠も挙げられている。たとえば「雪のように白い肌」の場合は、「肌」が本義、「雪」が喩義、「ように」が比喩の説明語句、「白い」が類似性の根拠となる。

あをによし奈良の都は咲く花の薫ふがごとく今盛りなり (③・328)

この歌について、近藤信義(1998)は「あをによし奈良の都は」が喩えるもの(趣意)、「咲く花の薫ふがごとく」が喩えられるもの(媒体)、「今盛りなり」が喩える心(根拠)であるとする。一方、内田賢徳(1993)は次のように述べている。

ここで類比されているのが「(奈良の)都」「(咲く)花」という二つの語でないことに留意すべきである。対しているのは、二つの句(主語―述語)「奈良の都は今盛りなり」と「咲く花薫ふ」である。二つのものの関係としてあるのではなく、ことの関係としてある。

比喩表現を二つのものの類比と考えるか、二つのことの類比と考えるかは難しい問題である。「雪のように白い肌」の例にしても、「肌」と「雪」が類比されていて「白い」が類似性の根拠であると考えられるが、「肌が白い」ということと「雪が白い」ということが類比されていると考えることもできる。ただし、譬喩歌の場合、注釈書などでは「二つのものの関係として」説明されることが多い。

ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり思ひしものを (③・392)

この歌について、『新編古典全集』は「女性を梅にたとえる」とし、『全歌講義』は「その夜の梅」を「その夜に逢った印象的な女性の比喩」としている。本稿でも「女性を梅になぞらえて」と述べた。しかし、厳密に言えば「女性」を「梅」にたとえている、すなわち「女性」と「梅」の間に類似性があるのではなく、「女性に逢わなかったこと」あるいは「女性を自分のものにしなかったこと」と「梅を折らなかつたこと」の間に類似性を見いだしたものであると考えられる。したがって、寓喩の歌は二つのものの関係ではなく、二つのことの関係としてある比喩表現の歌であるといえよう。そして、それは譬喩歌の類も同様であると考えられるのである。

アのaである408は、あなたがなでしこの花であったらと詠むもので、寓喩の歌と似た発想の歌であるが、「なでしこの花を手に取り持つこと」と「あなたに手を触れること」の関係から詠んだ歌である。また、イのaである390は「鴨が独り寝をしないこと」と「わたしが独り寝をする

こと」を比較するという二つのことの関係から詠んだ歌、そして、キの序詞的な歌である a の 397 も「岩本菅を根深く結ぶこと」と「心の奥深くで契りを交わすこと」という二つのことの関係から詠んだ歌と考えることができる。

このように考えると、同音や類音、掛詞など比喩的ではない序詞の歌が譬喩歌の類として存在していることも理解できるのではないか。つまり、比喩的な関係でなくても同音などによって結ばれる二つのことの関係から詠まれた歌であるから譬喩歌の類として「譬喩歌」に収められたのである。

さらに、それ以外とした第 4 のグループであるクの枕詞的な歌 1383 は、上森鉄也 (2013) が「塞かへて」は縁語的用法であるとしたが、それは「山川の水がほとぼしり流れること」と「心が沸き返ること」の関係から詠んだ歌であるということであり、ケの直喩の歌である 1367 も「むささびが鳥を待つこと」と「わたしがあなたを待つこと」の関係から詠んだ歌であると考えられよう。したがって、譬喩歌の類のア～ケは寓喩の歌ではないものの、二つのことの関係から詠まれている点では共通していると言えるのである。

そして、寓喩の歌は表現形式としては相手などを物に置き換えた上で表現するものであるが、本義と喩義という二つのことのうち本義を明示しないことにより、説明や強調ではなく暗示の効果をもつ。コの暗示の歌である 1371 は譬喩的表現ではないものの暗示であるという点では共通していることになる。

編者は、譬喩歌を二つのことの関係としてあるもので「斥言」していない暗示的な歌と認識していたのではないか。そして、譬喩歌の類もそれに類する歌であると考えたのではないかと思われるのである。

これに対して、「雪のように白い肌」は、「肌」を「雪」にたとえており、類似性の根拠は「白い」であって、肌と雪との間に類似性がある二つのものの関係としてあると考えることができる比喩表現であった。そして「白い」は「雪」の属性として顕著なものであり、「雪のように白い肌」は、肌が雪と同じぐらい白いというように、その類似性をもって説明し強調するという効果がある。それは「雪の肌」という隠喩でも同様であると考えられる。

そして、「譬喩歌の類にあらず」とされた 1375 の「朝霜の消易き命」は、この二つのものの関係としてあると考えることができる表現なのである。「命」が本義で「朝霜」が喩義であり、「消易き」が類似性の根拠であるといえよう。また、形容詞である「消易き」は「朝霜」の属性として顕著なものであり、命が朝霜と同じぐらい消えやすいと説明し強調している比喩表現であると考えられるのである。編者が 1375 を「譬喩歌の類にあらず」としたのは、このことが大きな理由であったのではなからうか。つまり、我々が典型的な比喩とするような二つのものの関係としてあると考えることができる表現の歌は、譬喩歌の類とは認めなかったのである。

7. 結

譬喩歌の類の表現形式は、4グループのうち3グループが巻3の譬喩歌の類と同じものである。そして、巻3の譬喩歌の類と同じ表現形式の歌は、譬喩歌の類45首中37首と82パーセントを占めており、残りの8首は全て巻7「譬喩歌」所収の歌である。したがって、譬喩歌の類の基本的な表現形式は巻3の譬喩歌の類のものと考えてよいであろう。そして、巻3の譬喩歌の類は、寓喩の歌と同じような発想であったり、比較の歌であったり、二つのことの関係としてある歌で、寓喩の歌ではないが同類の歌として認識され、連作であることなどの構成を重視して「譬喩歌」に収められたことにより生じたものと考えられる。

ただし、本来が同類の歌として「譬喩歌」に収められたものであるため、譬喩歌の類の表現形式に関する明確な基準はなくなっていき、巻7ではその他のサのような歌まで「譬喩歌」におさめられてしまったのではなかろうか。特に序詞的な譬喩歌の類は、笠女郎の3首目であったため「譬喩歌」に収められたものの、巻3の他の譬喩歌の類のように表現形式が寓喩の歌と似ているわけではない。そのため、序詞的な譬喩歌の類と寄物陳思の歌とをどのように区別したのかが不明であるというような曖昧さを残すことになってしまったのではないかと思われるのである。

参考文献

- 上森鉄也 2013、「万葉集巻七・一三七五譬喩歌の類にあらずの歌について」『萬葉語文研究』第9集、和泉書院、2013年10月。
- 井手至 1993、『遊文録万葉篇一』「第三篇万葉集譬喩歌の表現」和泉書院、1993年4月、271頁。
- 上森鉄也 1987、「譬喩歌における表現形式の混乱について―巻三・四を中心に―」『萬葉』125号、1987年2月。
- 平舘英子 1984、「笠女郎歌の構成」『東京聖徳短期大学紀要』17号、1984年3月。
- 青木生子 1998、『古代文芸における恋愛（上）』青木生子著作集第二巻「第三章三笠女郎」おうふう、1998年1月。
- 橋本四郎 1978、「佐伯赤麻呂と娘子の歌」『万葉集を学ぶ第三集』有斐閣、1978年3月。
- 上森鉄也 2010、「万葉集巻七『譬喩歌』所収の直喩歌一三六七について」『叙説』37号、2010年3月。
- 近藤信義 1998、「後期万葉集の譬喩歌の展開とその方法」『国語と国文学』75巻5号、1998年5月。
- 内田賢徳 1993、「比喩事典」『万葉集事典』學燈社、1993年8月、304頁

付記 本稿は2014年萬葉学会第67回全国大会（於天理大学）において発表した内容をもとにしています。その際に御質問・御教示くださった方々に心より感謝申し上げます。